

ウラをかくか、ウラのウラをかくか。

今年日本で行われる最大のイベントといえば、2005年日本国際博覧会「愛・地球博」。3月25日の開幕以来、国内外から大勢の入場者を集め、連日賑わいをみせている。約18,000年前マンモスが冷凍・展示されている「マンモスラボ」、楽器演奏ロボットのショーが繰り広げられる「トヨタグループ館」など、人気パビリオンの前には常に人垣の列。それほど博覧会のテーマ「自然の叡智」が、来場者の心を捉えたということか…。今回の『流通・通』は、そんな万博会場で拾った話題から。



ウラをかいたつもりが…

開幕直後、入場者の入りか心配された「愛・地球博」。その後の出足はまずまずとのことで、夏の行楽シーズンを迎えるこれからが「勝負どころ」といえよう。1970年に開催された大阪万博で、「月の石」をひと目観ようと数時間並んだ経験を持つ筆者も、35年ぶりの国際博覧会をのぞいてみよう、会場に足を運んでみた。訪れたのは、ゴールデンウィークを過ぎた5月中旬。週末の混雑を避けようと、休日明けの月曜日をねらって会場へ。超人気パビリオンは無理でも、それほど並ばずにひと回りできるかと思いきや、名古屋駅のバスターミナルで出鼻をくじかれてしまった。月曜の、しかも午前9時を過ぎたばかりだというのに、バス停の前には長蛇の列。3台のシャトルバスがピストン輸送をしているにもかかわらず、乗客の列がなかなか前に進まない。しびれを切らした乗客の一人が、バス乗り場のスタッフに「どうなってんの、月曜日なのに」と苦言を呈す。スタッフいわく、「月曜日は意外に混むんですよ。皆さん、混雑する日曜日を避けて来るみたいで」とのこと。スタートから筆者の思惑が外れたかっこうだ。週始めの月曜日は比較的空いているだろうと、「ウラをかいた」つもりが当て

外れ。こうも「ウラをかく」人が多くては、「ウラをかいた」ことにはならないと、独り言を言ってみても後の祭り。とはいえ、改めて出直すというわけにもいかず、とにかく会場まで行ってみただが…。

ウラのウラをかいてみるのも…

長久手会場についてまずびっくり。その広大な面積に驚かされる。次に実感するのは、バスターミナル(筆者が着いたのは東ターミナル)からパビリオン群のあるエリアまでの距離の長さ。さらに、入り口では持ち物チェックと金属探知機がお出迎え。ん～、さすが国際博覧会。安全対策に万全を期したい気持ちはわかるが、これから出会うであろう感動に期待を膨らませていた筆者にとっては、やや興奮の感が否めない。入場料も「ビッグ」である。当日券が大人一人4,600円。まあ、これだけの展示施設を観られるのだから安いものか、と納得させつつ、メインストリートを歩き始めたのだが…。やはりここにも、人、人、人。外国のパビリオンは待ち時間なしで観られる、と聞いていたのだが、中国や韓国、アメリカ館などはいずれも数十分待ちの状態であった。これから「愛・地球博」に行ってみようとしている皆さんに、ひと言。グ

ローバル・ループに沿って各ゾーンをひと回りするだけで2時間近くかかり、レストランはどこも行列です…。この際「ウラのウラをかく」つもりで、スケジュールやパビリオン攻略の戦略を組み立ててみてはいかが。

パビリオンだけに 目を奪われず…

最後に、万博会場でみつけた地元の人たちのアイデアをひとつ。パブリック・スペースに設置された水飲み・手洗いの台に、陶磁器職人たちの手による様々なタイトルの作品が使われていたのである。『Re 瀬戸』と名づけられたこの企画は、瀬戸市と愛知県陶磁器工業協同組合によるもので、いわば職人たちによるコラボレーション。会場を訪れた人たちへのもてなしであると同時に、環境やひとにやさしい素材を使った地場産業の再興をめざした取り組みでもある。つつい華やかなパビリオンに目が奪われがちだが、会場に点在する地域の人たちの思いや工夫を探してみるのも楽しいもの。まちづくりや地域おこしに役立つ情報は、意外なところに転がっているものなのである。

経営コンサルタント 岩淵公二
(ジーベック代表取締役)